

執務用

房総半島総合開発地域

---

# 土地分類基本調査

---

上総大原・勝浦

5万分の1

国土調査

千葉県

1973

## 序 文

近年の著しい都市化、工業化の波は、人口産業の都市への集中をひきおこしている。千葉県人口をみても昭和35年の約230万人から、昭和49年2月の約388万人へと急増し、今後ますます増加する傾向にある。これに宅地開発、ゴルフ場造成等多くの土地開発が進められている。さらに、新東京国際空港、東京湾横断道路、千葉港の整備等々大規模なプロジェクトが予定されており、房総半島は大きく変ぼうしようとしている。

しかし一方では、都市化、工業化の波による自然環境の破壊、生活環境の悪化をひきおこし、人間と自然とのかかわりあいに関して大きな問題をあらためて提起している。

このような中で本県では、国土の高度利用に資するため、国土の実態を科学的且つ総合的に調査することを目的とした国土調査法に基づき開発地域土地分類基本調査を、昭和45年「館山」、昭和46年「鴨川」、昭和47年「那古」地域について調査を実施してきた。

本年度は「上総大原」及び「勝浦」図幅について調査をすすめてきたが、このほど、これをあわせてとりまとめ調査を終了したので、ここに皆様にご提示するものであり、今後の諸開発事業において広く利用されるよう望むものである。

おわりに、本調査にあたり資料の収集調査、図簿の作成にあたりご協力をいただいた各位に深く感謝の意を表する次第である。

昭和49年3月

千葉県企画部長

山 岡 雄 教

# ま え が き

1. 本調査は、千葉県が事業主体であり、千葉大学の協力を得て行なったものである。
2. 本調査は、自然条件のうち、土地の基本的性格を形成している地形、表層地質、土壌の3要素を基礎とし、これに傾斜区分、水系・谷密度、開発規制、土地利用現況を加味し、その結果を相互に有機的に組合せることによって科学的な土地利用の可能性を分類するものである。
3. 本調査成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査簿である。

# 目 次

## 序 文

### ま え が き

## 総 論

- I 位置および行政区画…………… 1
- II 人 口…………… 2
- III 地 域 の 特 性…………… 3
- IV 主要産業の概要…………… 6
- V 開 発 の 現 状…………… 8

## 各 論

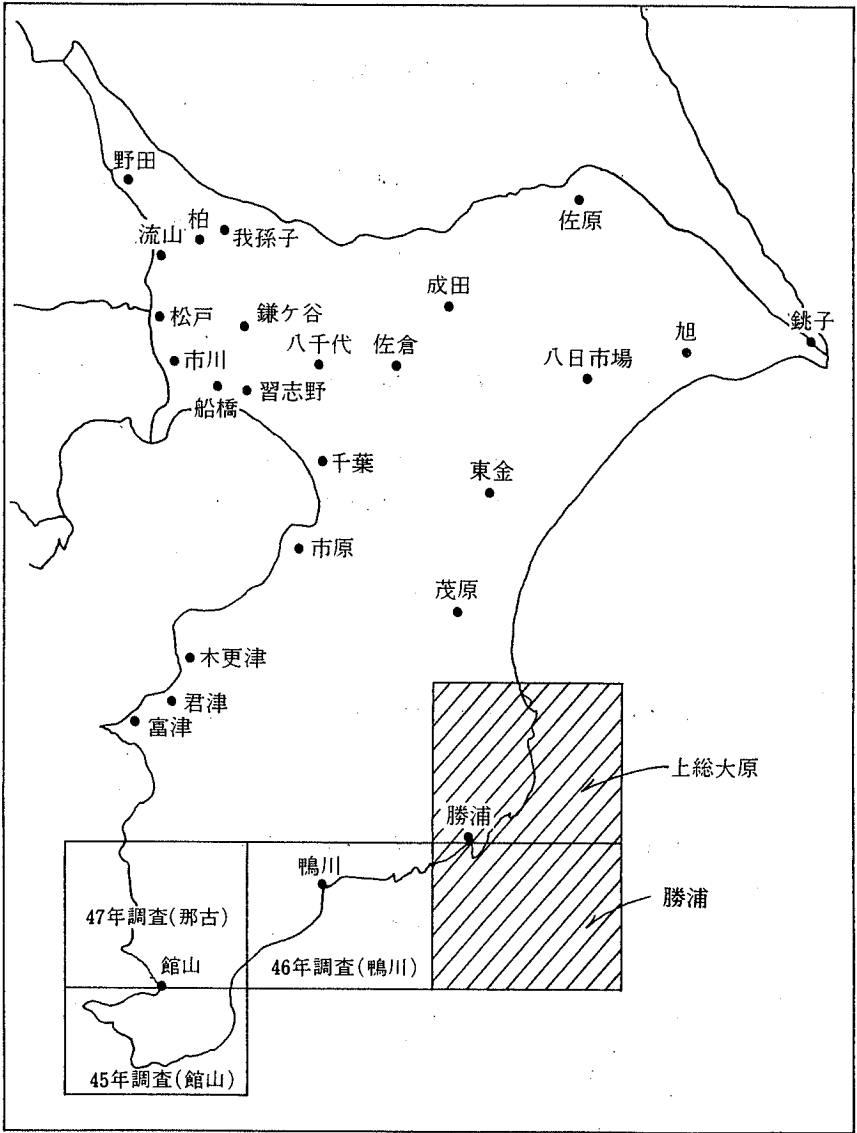
- I 地 形 分 類 図…………… 9
- II 表 層 地 質 図…………… 18
- III 土 壌 図…………… 22
- IV 水系・谷密度図…………… 25
- V 傾 斜 区 分 図…………… 28
- VI 開 発 規 制 図…………… 31
- VII 土地利用現況図…………… 34

# 總論

調査・成果の作成機関及び担当者一覧

企画調整編集	千葉県企画部企画課	課長	古谷康長
	"	係長	高梨義雄
	"	副主査	池谷輝雄
	"	主任主事	高梨嘉己
	"	主事	斉藤剛
調整連絡	千葉県農林部農産課	係長	大屋三左夫
	"	技師	奥西元一
	千葉県農林部林務課	補佐	深山英成
地形調査	千葉大学理学部	文部教官	川崎逸郎
	"		関根清
	"		荒瀬尚良
	"		宮沢洋介
	"		妙圓蘭猛
表層地質調査	千葉大学教養部	文部教官	近藤精造
	"	"	高井憲治
	"		中島信久
土壌調査	千葉県農業試験場	地力保全研究室長	三好洋
	"	技師	松本直治
	千葉県林業試験場	環境緑化研究室長	青沼和夫
	"	技師	岩井宏寿
関発関連調査	千葉大学理学部	文部教官	川崎逸郎
傾斜区分調査 水系・谷密度 調査 開発規制調査 土地利用現況 調査	"		関根清
	"		荒瀬尚良
	"		宮沢洋介
	"		妙圓蘭猛
	千葉県企画部企画課	副主査	池谷輝雄
"	主事	長倉典	

# 位置図



0 10 20 30 40km

# I 位置および行政区画

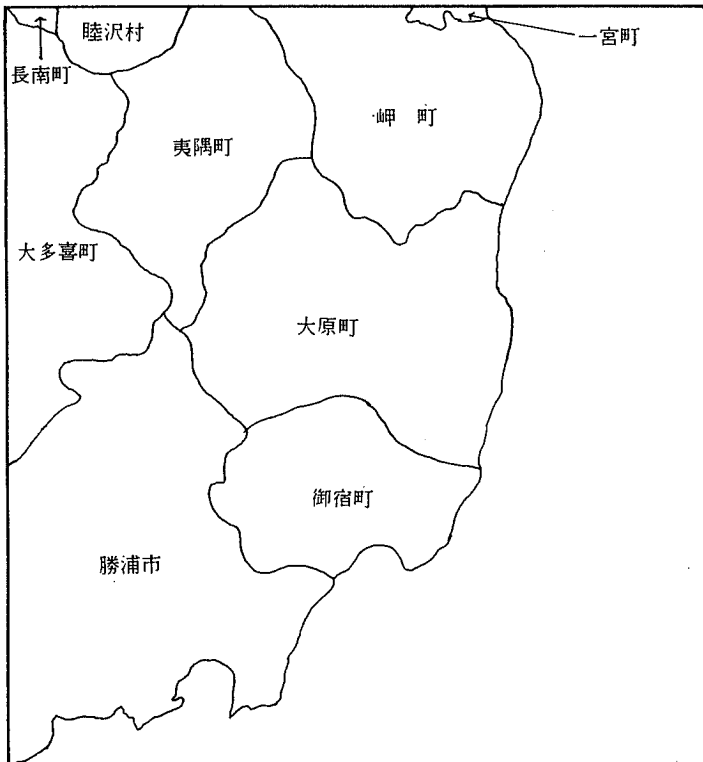
## 1. 位置

「上総大原、勝浦」図幅は、房総半島の南部、南房総の北東部に位置する。経緯度的位置は、東経 $140^{\circ}15'$ ～ $140^{\circ}30'$ 、北緯 $35^{\circ}00'$ ～ $35^{\circ}20'$ の範囲である。

## 2. 行政区画

本図幅内の行政区画は、大原町、御宿町の全域と夷隅町、岬町、勝浦市の大部分、大多喜町、長南町、睦沢村、一宮町の1部の1市7町1村から成っている。

第1図 行政区画図





## II 人 口

爆発的な増加の傾向にある本県人口も、近郊整備地帯以外は減少の傾向にあり、第1表でわかるように本図幅に含まれる地域も人口減少が続いている。

夷隅町、岬町、大原町、御宿町、勝浦市についてみると、昭和45年までは減少傾向が強く、特に若年層の流出が目立っており、40年に10～14才であった者9,343人が5年後には6,832人と対40年比で26.8%の減少を示している。これはこの地域が第1次産業中心の産業構造であり、就業機会が少ないことによる都市への流出のためと思われる。最近では第1表でわかるように、やや減少傾向が鈍化してきている。

第1表 世帯数、人口、人口の移動状況

区 分		年 次				
		昭和40年	昭和45年	昭和46年	昭和47年	昭和48年
岬 町	世帯数	2,843	2,912	2,947	2,989	3,045
	人口	13,030	12,575	12,483	12,381	12,501
	移動状況 { 総数	—	△455	△92	△102	120
	自然増減	—	73	10	8	65
	社会増減	—	△528	△102	△110	55
夷 隅 町	世帯数	2,042	2,025	2,044	2,061	2,066
	人口	9,638	8,882	8,752	8,725	8,659
	移動状況 { 総数	—	△756	△130	△27	△66
	自然増減	—	7	14	15	37
	社会増減	—	△763	△144	△42	△103
大 原 町	世帯数	5,068	5,210	5,278	5,326	5,380
	人口	22,518	21,655	21,708	21,650	21,547
	移動状況 { 総数	—	△863	53	△58	△103
	自然増減	—	409	105	112	95
	社会増減	—	△1,272	△52	△170	△198
御 宿 町	世帯数	2,075	2,136	2,144	2,165	2,171
	人口	8,818	8,475	8,444	8,449	8,426
	移動状況 { 総数	—	△353	△31	5	△23
	自然増減	—	99	28	30	45
	社会増減	—	△442	△59	△25	△68
勝 浦 市	世帯数	6,235	6,314	6,385	6,504	6,562
	人口	29,133	28,065	27,922	27,729	27,586
	移動状況 { 総数	—	△1,068	△143	△193	△143
	自然増減	—	544	109	96	89
	社会増減	—	△1,612	△252	△289	△232

### III 地域の特 性

#### 1. 自然的特性

「上総大原・勝浦」図幅は、県内でも比較的高い丘陵地帯であり、山林が多く、その間を夷隅川が大きく蛇行しながら流れているのが目立っている。また、ほとんどが国定公園に指定されている屈曲した海岸線を擁し、全体として複雑な地形を成している。

##### (1) 地 勢

この地域の地形は、標高100～200m程度の丘陵が連なっており、これを夷隅川とその支流が切り込んでいる。平地は、これらの川沿いと、日在、網代といった河口部にある。

さらに谷間には溜池が多く点在しているのが目につく。一方、海岸線は、太平洋の潮流による海蝕を受け、太東岬、岩船近辺、八幡岬等が小さな湾をはさんでつき出しており、多くが海岸段丘状の地形をなしている。

これらを形成する地層は、ほとんどが新第三紀にできたものであり、岩相をなしている。時代的には、勝浦付近がこの図幅では一番古く、北へ向って新しくなっている。

河川についてみると、なんと言っても夷隅川が大きく蛇行をしながら南から北へ、さらに大多喜町を支点に西から東へ流れながらこの地域を分断しているのが特色である。夷隅川を中心に落合川、山田川、大野川といった支流が多く出ている。他に、塩田川、新田川、清水川、墨名川の中小河川があるが、いずれも流量は少ない。これらこの地域の河川はすべて2級河川である。

##### (2) 気 象

気象についてみると、温暖多雨の気候であり、第2表でわかるように、年間の平均気温は15.6度と比較的高く、降水量も例年2,000mm近くを記録している。昭和46年9月台風25号の来襲の際、大雨（勝浦最大400mm以上/24h）に地形的条件が加わって、夷隅川氾濫、土砂崩壊の大災害の発生など過去にしばしば災害をひきおこしている。しかし、一般的にみれば、黒潮に影響された温暖な恵まれた気候と言える。

第2表 月別平均気温、降水量

(昭和48年) 大多喜測候所資料

種 別	月 別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均・計
平均気温 (°C)		5.4	6.1	7.8	16.2	18.5	20.4	25.5	29.1	23.6	17.0	12.3	5.4	15.6
降水量 (mm)		200	78	22	229	196	128	51	69	166	315	83	0	1537

### (3) 動植物

植物についてみると、この地域は、広葉樹と針葉樹が拮抗している地域であり、シイ、タブ、コナラ、クリ、ヒノキ、スギ、アカマツ等が多くみられる。一部に極相林も確認されており、県内では森林の多く残された地域と言えよう。他に海岸部には、トベラ、イソギクの他ハマボウフウ等の海浜性の植物がみられる。

シイ、タブの林は、南部勝浦の海よりの山にみられる。また、勝浦、御宿、大原の内陸方面には、コナラ、クリ等の落葉広葉樹林が多くみられる。さらに、夷隅川等の川沿いにはメダケ林が点在している。

鳥類は、多くの種類が棲息しているが、主なものは、キジ、ヤマドリ、コジュケイ、メジロ、キジバト、トビ等であり、他にシギ、チドリ、カモといった水鳥もみられる。

哺乳類は、野ウサギ、イタチ、リス等が主なものである。

一方海に目をやると、黒潮と親潮がぶつかり合って複雑な海況を呈しており、ひらめ、たい、ぶり、べら等の他、たこ、あわび、いせえび等がみられる。また、海藻類ではほんだわら、あらめ、いそばな等がみられる。

## 2. 社会経済的特性

この地域は首都圏から遠隔地にあること、地形的制約による交通網整備の遅れ等により他地域より社会経済的に見て立ち遅れてきた。はっきりとした中核都市のないこと、谷津田の多い生産性の低い農業、全般的に水揚げの減っている漁業が産業の中心であったので県内でも所得水準の低い地域であった。

しかし、近年、鉄道の整備、観光レクリエーション開発、内陸工業開発、農水産業の近代化等、徐々に地域の振興がみられてきた。

今後、この地域の自然的特性を活かした積極的な産業振興が望まれている。

第3表 就業構造

(昭和45年国勢調査)

産業構造	市町村		勝浦市		夷隔町		御宿町		大原町		岬町	
	人数	シェア-%	人数	シェア-%	人数	シェア-%	人数	シェア-%	人数	シェア-%	人数	シェア-%
総計	13,136	100.0	4,848	100.0	3,995	100.0	11,216	100.0	6,935	100.0		
第一次産業	計	4,800	37.1	2,700	55.8	1,302	32.7	4,316	38.6	3,543	51.1	
	農業・狩・猟業	3,204	24.4	2,698	55.7	944	23.6	3,626	32.3	3,513	50.7	
	林業・漁業・水産養殖業	1,645	12.5	1	0.0	3	0.1	4	0.0	1	0.0	
第二次産業	計	2,537	19.3	841	17.3	1,007	25.2	2,719	24.2	1,245	18.0	
	鉱業	5	0.0	5	0.1	1	0.0	4	0.0	4	0.1	
	建設業	1,678	12.8	687	14.1	649	16.3	1,745	15.6	904	13.0	
第三次産業	計	5,717	43.6	1,305	26.9	1,683	42.1	4,174	37.2	2,143	30.9	
	卸売業・小売業	2,245	17.1	479	9.9	585	14.6	1,670	14.9	793	11.4	
	金融・保険・不動産業 運輸通信業 電気・ガス・水道業 娯楽・サービス業	153	1.2	38	0.8	47	1.2	163	1.5	79	1.1	
分類不能	12	0.0	2	0.0	3	0.0	7	0.0	4	0.0		

## IV 主要産業

### 1. 農 業

気候的には温暖多雨と条件には恵まれながらも、県内では首都圏より遠隔地にあること、交通網の整備の遅れ、起伏の多い地形等の制約により、従来から生産性の低い農業地帯となってきた。

主要作物は、なんと言っても稲作が中心であり、粗生産額において50%を越えており、米作依存度が強い地域である。他に、トマト、きゅうり等の野菜や乳牛、卵鶏等の畜産も見られる。またこの地域の特色として、しいたけ、たけのこ、くり等の特殊林産物の生産が山間部で行なわれている。

今後は、野菜、畜産、特殊林産物の伸びが期待されている。

### 2. 水 産 業

本図幅をみると、変化に豊んだ海岸線が続き、網代湾、勝浦湾、興津港等小さな入江があり漁業に有利な条件に恵まれている。漁港はこれら自然的条件に立脚して南部に集中している。

この地域は黒潮と親潮がぶつかりあった海況の複雑な所であり、魚種は豊富である。まき網によるいわしを始めかつお、いか、さば、ぶりの他あわび、さざえ、いせえび、たこ等が多く水揚げされている。

最近水揚げの多くを占めるいかの不漁が続き、漁業不振に陥っている。また、不安定な収入、重労働といった原因から若年層が都心へ流出しており、漁業従事者の老齢化が問題となっている。

しかし、近年高収入が見込まれるあわび養殖並びに水産加工業の振興が、今後この地域の漁業安定化の一助となるものと期待されている。

### 3. 商 業

大原町、勝浦市、大多喜町、御宿町といったそれぞれまとまった小さな商圏が形成されており、地元購買力の吸収率は比較的高いがこの地域を一本化する程強力な商業中心勢力はない。交通網の整備により、茂原市、千葉市への流出が見られるようになってきており、地元購買力の確保をはじめ、観光レクリエーション客を対象とした地域の特性を活かした商業振興が図られる必要がある。

#### 4. 観 光

都心からの比較的近距离できれいな海として、勝浦、御宿、大原等の本地域への海水浴客の入り込みは多い。また、たい、めじな、ひらめ、いきき等の釣り場としても人気のある地域である。このような海浜性の観光を中心に年々順調に客足は伸びており、外房線の電化、道路網の整備等によりさらに入り込み数の増加が見込まれる。

しかし、地域の産業としては、周年性、安定性に欠けるため、その改善策として、緑豊かな山間に千葉県開発庁により587ha、千葉県観光公社の100ha、その他民間による、大規模レクリエーション基地造成、ゴルフ場等のほか、勝浦に海中公園が予定されている。

一方、このような新たなレクリエーション開発の動向に対して、良好な自然を保全をしていく対策が望まれている。

## V 開発の現況

この地域は、第一次産業が中心の産業構造であり、他地域に比べ開発の進展が遅れている。しかし、最近、レジャー、ゴルフ場等の観光レクリエーション開発が見られ、これらへの適切な対応が今後の課題となつてこよう。

### 1. 道路、鉄道

この地域の道路を見ると、国道2路線、主要地方道2路線、一般県道18路線があり、縦横に配置されている。

海岸沿いに走る国道128号線、南房総を斜めに貫いて勝浦へ至る国道297号線並びに主要地方道大多喜大原線を中心に一般県道が配置されている。

現在、国道128号線の混雑解消のため、勝浦有料道路の建設が予定されている。

鉄道は、国鉄外房線及び木原線があるが、外房線は昭和47年7月の電化完了による都心との時間距離の短縮により便利さが増大した反面、木原線は自動車交通増大により乗客数が激減し県内一の赤字線になっている。

### 2. 港 湾

避難港の指定を受けている興津港が1港あるが、昭和46年実績では利用回数31であつて通常は地元漁船101隻が利用しているのみである。

### 3. 漁 港

この地域の漁港は11と多くを数え、その大半が太平洋の荒波の影響の少ない勝浦方面に寄っている。第3種漁港の勝浦、大原の2港を中心に、第2種漁港は岸和田、勝浦東部、松部の3港、残りの6港が第1種漁港がある。

### 4. 水 資 源

流路延長本県第5位にある夷隅川を中心に大野川、山田川、落合川、江場土川、新田川、塩田川、清水川、墨名川の9河川があり、すべて2級河川である。現在、上水、農水の確保を図るため荒木根ダムを建設中のほか、東、御宿のダム建設が計画されている。

# 各 論



## I 地形分類図

「上総大原」「勝浦図幅」を合わせてみると、房総半島第一の流域面積(299.4km<sup>2</sup>)をもつ夷隅川の美事な蛇行が眼に入るのが本図幅の特徴の一つである。すべての丘陵地、低地は夷隅川の支流によって刻まれているとよい。次に丘陵地の谷間に農耕用、飲料用の貯水池の多いことも本図幅の特徴であろう。

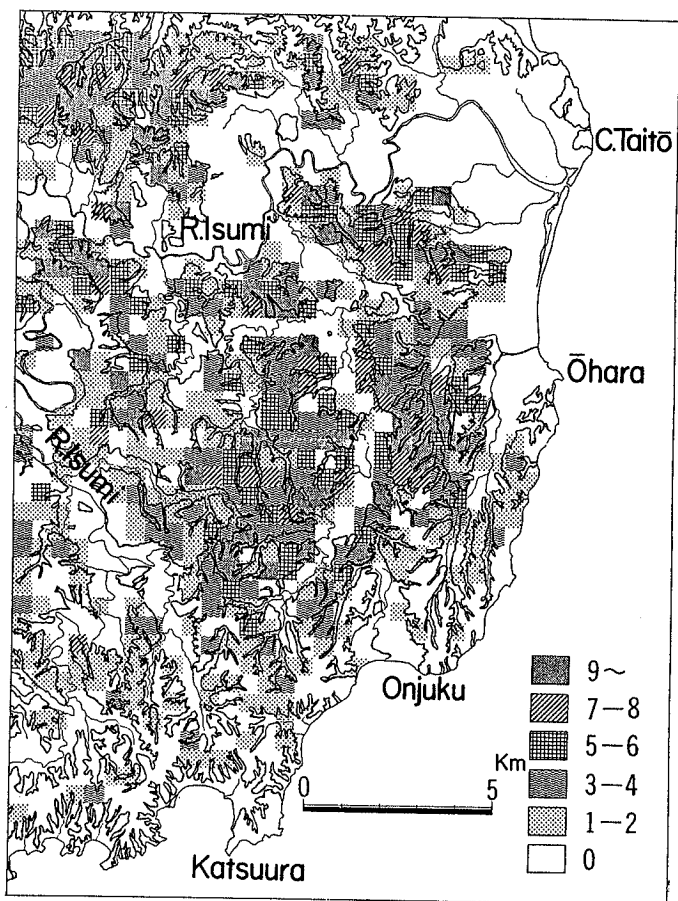
また、本図幅の大原町地域は、昭和46年台風25号がもたらした260mm以上/24時間(46.9.7)の集中豪雨によって丘陵斜面に崩壊(かけ崩れ、表層堆積物の斜面からの剝離と滑落)が発生し地域住民は大きな災害を被ったところである。第2図は本図に500mの方眼をかけ、それぞれの方眼の中に、航空機からの観察と航空写真から数えた崩壊地を入れて分布図を作ったものである。本地域の地形変化の実態をここに見ることができる。

次に本図幅全体の地形をみるため切峯面図をつくってみると第3図のようになっている。本図幅の大部分は200m以下の丘陵地であることがわかる。その丘陵地は全体として東から西側に高く、図幅の北にある夷隅川の本流に向かって低い。本図幅の丘陵地は、落合川の東にある100m付近のところと、落合川と夷隅川の間にある180m付近、夷隅川の北では160m付近、および図幅の左端夷隅川以西にある200m付近の4地域に分かれている。

切峯面図に流路を入れてみると、切峯面図の等値線がつくる谷すじに沿って流れている。

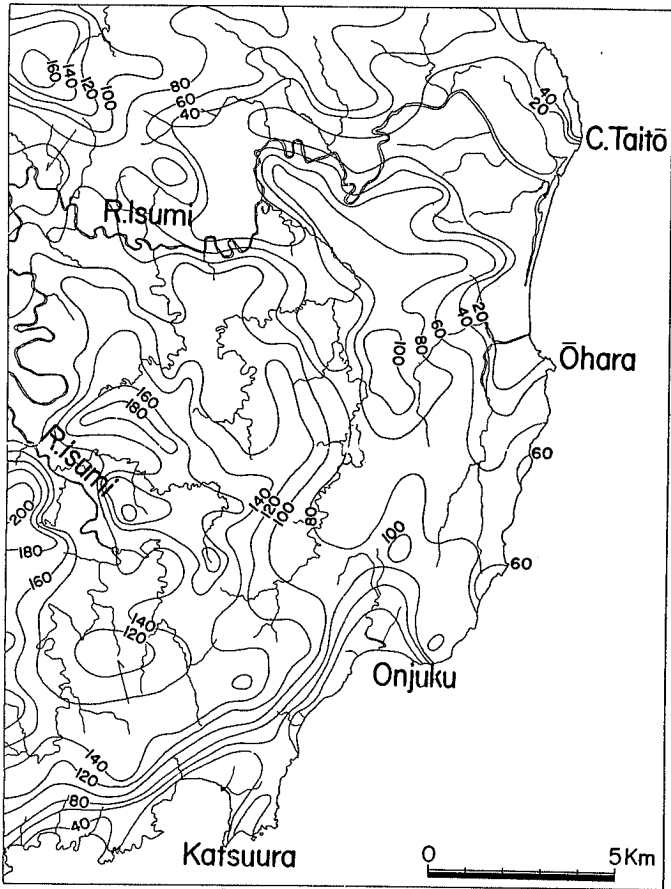
これらの流路で夷隅川に合流するものは小さな流れであっても曲流(蛇行)の度合いが大きい。その理由は現在のところ不明である。「那古図幅」のように河川の流路が地盤運動の影響を強く受けたと思われるようなところもない。また、図幅の南、御宿より奥津の海岸に沿っては切峯面図の等値線がつくる急斜面が続いている。

第4図は本図幅の起伏量値の数値分布図で、40~80mのところを図幅の50%以上を占めている。最高値は60~80mで32%を占める。また本図幅では起伏量値の高いところと、切峯面の等値線がつくる高い地形のところとは一致しているので「鴨川・那古」の両図幅のように切峯面の中に起伏量値をアミで入れることは略した。



第2図 昭和46年台風25号による上総大原地域の崩壊地分布図

この図は1万3千分の1航空写真で実体視し、崩壊地を選び出し（現地調査の結果をも加えて）500mの方眼をかけた5万分の1地形図（本図幅）の中に記入し、一つの方眼の中に入る崩壊地数を数えて階級区分を行ない分布図とした。



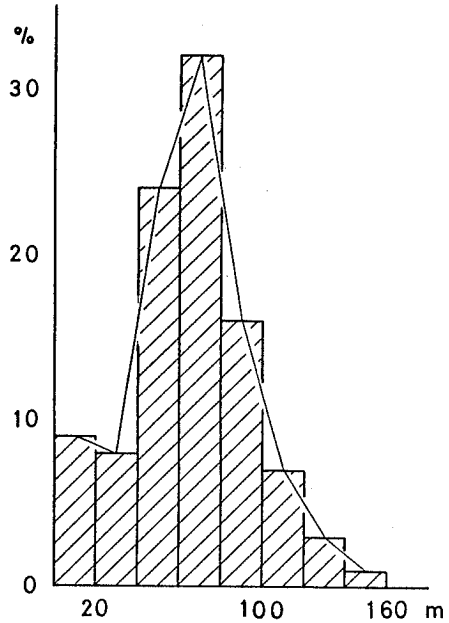
第3図 勝浦地域の切峰面図

図幅を縦横20等分した方眼の中の最高点の値を読みとり、各方眼の中の値から等値線を引いてつくった。等値線は20mである。図幅の中の高まりの形や位置、急傾斜の位置や方向、蛇行と谷すじとの関係など、全域の特徴をつかむことができる。

本図幅を次のような地形区に区分した。

- |       |              |
|-------|--------------|
| I 丘陵地 | I a 夷隅丘陵*    |
|       | I b 小湊・勝浦丘陵  |
|       | I c 布施・岩船丘陵  |
| II 低地 | II a 夷隅川低地*  |
|       | II b 落合川低地   |
|       | II c 塩田川低地   |
|       | II d 御宿低地    |
|       | II e 勝浦低地    |
|       | II f 鵜原・興津低地 |

以上のうち\*印は隣接図幅である鴨川図幅に記載されている名称である。また夷隅丘陵は鴨川図幅の夷隅川丘陵と同じである。



第4図 起伏量値の分布

## I 丘陵地

### 夷隅丘陵 (I a)

東は落合川、西は夷隅川、南は小湊・勝浦丘陵と接する本図幅の中心となる丘陵地で起伏量は平均して40~80mあり細かく開析されている。詳しくみると夷隅丘陵は、本図幅の北を流れる夷隅川の本流の北側にある地域、段丘をもたない平坦な低地(旧河道の谷底面)のあるところと、夷隅川の南側にみられるように、丘陵が集合して高まりをつくったよう

な地域とに大別できる。この南側の丘陵には美事な蛇行と数段の河岸段丘をもった谷底面が入込んでいる。

冬季、機上からこの地域をみると、鋭い分水界の連なりがあり山肌が林の間から白く見えて全域がやせ尾根の集合のような感じを与える。そして丘陵を刻む谷地は谷頭まで水田となっているが、ここ数年休耕田となっているところが多い。とくに昭和46年台風25号来襲以降は谷地奥の休耕田は増加の傾向が見られる。丘陵斜面はすべて林地となっている。しかし、第三紀の砂岩、泥岩や砂岩泥岩互層の基盤そのものが細かく開析されているため、急勾配の直線斜面が多く基盤をおおう風化層、残積土層の発達は極めて悪い。そのためか美事に育成した林地は少ない。あちらこちらの斜面上に赤味を帯びた冬の林地の中に淡緑の竹林が混交しているという妙な植生分布が見られる。

昭和46年の台風25号は、このような地域に260mm以上/24時間という集中豪雨をもたらした。透水性土層が薄く大部分が難透水性岩盤の丘陵地では、台風の中心付近の最大風速30m以上という風が丘陵斜面の林地をゆきぶり、根の張り方の浅い当地域では風と雨の集中被害を受け忽ち風化土層の斜面滑落、崩壊となったのであろう。また谷地は豪雨の集水するところとなり急流となり斜面から剝離した土砂とともに下流に押し出し多くの犠牲者を出した。そのあとは、機上からみるとあちらこちらの丘陵斜面や谷地に今も見つけることができる。

以上のようなことは本図幅の丘陵地全域について共通にいえることである。

#### 小湊・勝浦丘陵（I b）

本図幅内では夷隅川丘陵を太平洋側から取りまくようにしてあり、夷隅丘陵と接するところは分水界をつくり、分水界より海側では開析されて細長くなった尾根がつくる急斜面の多い地域である。海岸まで伸びた細長い尾根は海食によって切断され海食崖となり海食崖の下には新しい海食棚が作られつつある。太平洋側から夷隅丘陵との境界に入る谷は意外に深く夷隅丘陵の稜線近くまで進み、夷隅川低地から伸びた谷頭の直下にまで迫っているところが大部分である。

つまり、夷隅丘陵と小湊・勝浦丘陵の境界である稜線付近では、太平洋から入る谷の方が夷隅川の谷底よりはるかに低い。これは河川の争奪が行われようとしている寸前の地形で、地震や集中豪雨時には要注意のところである。

### 布施・岩船丘陵（Ic）

東は太平洋、西は落合川、南は御宿低地、北は夷隅川によって囲まれた地域である。丘陵地の形態は前記の夷隅丘陵と全く同じといえよう。違うところは、落合川より東側では丘陵地に入る川の蛇行が夷隅丘陵のように著しくないことである。いまひとつは、夷隅丘陵のように丘陵全体が集まり塊ったという形状ではなく、尾根の配列（走り方）に規則性がみられることである。



第5図 機上から見た三十根付近の海食崖の景観

この付近の海底には陸上につづく谷すじのあとが海底に白く見える。(昭和49年1月18日、千葉大学、川崎撮影)

本丘陵の東縁をみると、北半は大原町から北にのびる砂丘地に接し、南は大原から御宿につづく海食崖となっている。この海食崖に沿って飛んでみると、小さい谷がいくつも海

に向かって口をあけているのを見ることができる(写真参照)。そして、海食崖の直ぐ下の海底には、陸上の谷の延長のところに白い砂が谷を埋積して谷のりんかくをあらわしており、尾根に相当するところは藻類が付着した黒い海食棚となっている。このようなことから岩船付近の丘陵の規模を推測すると、海食崖から東の海中に消えた地形は、布施・岩船丘陵とほぼ同程度の丘陵地であったろうということができる。

(千葉大学文部教官 川崎逸郎)

## 2 低 地

### 夷隅川低地 (II a)

本図幅の中の夷隅川低地は「鴨川図幅」に記載した夷隅川低地の下流部にあたる。本図幅では中流部から下流部に至る谷底平野を総称して夷隅川低地と呼ぶことにした。この低地の中には、著しい蛇行の夷隅川の本流と支流、蛇行のあとがそのまま残っている起伏に富んだ段丘面、下流地域に見られる平坦な低地（ここには大きな蛇行のあとが地割にそのまま残っている）……等が特徴である。

中流地域の段丘面と夷隅丘陵地の中にある夷隅川の支流がつくった段丘面は畑地、宅地に利用されている。とくに中流地域の広い段丘面は大規模な造成作業が進んでいるところが多い。下流地域の平坦地は大部分水田となっているが道路の整備拡張とともに、ここにも宅地化の影響が次第に強くなってゆくようである。

### 落合川低地 (II b)

布施・岩船丘陵と夷隅丘陵地を分けている低地で夷隅川に合流する落合川が流れている。谷巾をみると、本図幅の左端夷隅川の中流地域とほぼ等しいが夷隅川中流ほど段丘面の発達は見られず巾巾も蛇行も小規模で極めて平坦な谷底面の地域である。この谷底面の大部分は水田となっているが、わずかな段丘面のたかまりが畑地と集落になっている。

### 塩田川低地 (II c)

布施・岩船丘陵の中の釈迦谷と、大原から浪花の南北方向にのびる2つの低地を塩田川の本流と支流が流れている。ここを塩田川低地として区分した。谷頭付近まで平坦な谷底がつづいている。西にある落合川低地と違って水田の土壌が薄いところでもある。岩船付近で南北方向に入る細長い谷地では客土しているところもあり、休耕田が次第に増えている傾向にある。釈迦谷とその東にある新田谷では周縁の丘陵地からの水の供給が多いところといえよう。

### 御宿低地 (II d)、勝浦低地 (II e)、鶴原興津低地 (II f)

以上の低地は太平洋側に開いており、地形からみると共通するところが多いので一括して記載する。御宿低地と勝浦低地は低い海岸段丘の上に厚い砂層（砂丘）を載せている。御宿低地の周縁では丘陵斜面に吹き上げられた砂が厚い層となっているところが多い。



低地の規模をみると、御宿低地が最も大きく背後に三角形をした広い水田地域が広がっている。鶴原・興津低地は小湊・勝浦丘陵の細長い尾根すじが背後に迫ったところで、海側に面したところには小さな砂丘が横たわり、低地全体が低い海岸段丘状である。これら低地の前面（海側）を通る道路は次第に整備され拡張されている。

以上の低地は災害と地形変化の立場からみると、背後の丘陵地斜面が細長いこと、やせ尾根で被露土層が薄いこと、海岸から稜線までの距離が短いこと……等、いわゆる山ふところが小さいので、1時間に30mm程度の雨が3時間以上の集中豪雨になると各所で斜面崩壊と鉄砲水が、また大地震発生時には海岸側の斜面崩壊と津波……等に襲われたばあいの被害は大きくなる可能性のあるところといえよう。

（千葉大学文部教官 川崎逸郎）

## II 表層地質図

本地域の大半は上総層群から構成され、北東から南西にのびる走向と、北西落ちの単斜構造をもって分布している。したがって、図幅の北西端に、この地域で最上位の国本層が分布し、南東にいくほど下位の地層となり、上総層群最下部の黒滝層は図幅の南端近くに露出する。

これら上総層群と黒滝不整合で境する豊岡層群および安房層群の地層は、地域の最南端に存在している。また、この地域には南北性の大小多数の断層が発達しており、特に大田代層分布地域以北および南東部の海岸地域ではよく観察される。

沖積層の地層は海岸低地および丘陵を切る谷底平野に分布しており、洪積世の堆積と推定される風化火山灰層が太東崎、大原町および夷隅川上流の丘陵地域に薄くのっていることがある。

図幅地域内にみられる地層の層序は第4表のとおりである。

第4表 層 序

時 代		層 群		地 層	
第 四 紀	沖 積 世				
	洪 積 世				
新 第 三 紀	鮮 新 世	梅 が 瀬 層			
		大 田 代 層			
		黄 和 田 層			
		大 原 層			
		浪 花 層			
紀	中 新 世	三 浦 層 群	豊 岡	勝 浦 層	
				黒 滝 層	
			安 房	安 野 層	
				天 津 層	
				清 澄 層	
				天 津 層	

## 1. 未固結堆積物

### 1-1 泥がち堆積物 (m)

泥がち堆積物は、夷隅川、塩田川などの河口地域に広く分布するが、それぞれの本流および支流沿いの丘陵を切る谷底平野にも分布している。

### 1-2 砂がち堆積物 (s)

砂がち堆積物は、海岸の浜砂および砂丘堆積物として存在しており、和泉浦、日在浦およびその後背地に広く分布し、また網代湾、勝浦湾、鶴原、興津の海岸沿いにも分布している。

## 2. 半固結～固結堆積物

### 2-1 泥岩 1 (ms<sub>1</sub>)

本図幅内では、北西端の睦沢村と長南町の境界付近に分布し、国本層に相当する。この地域では、塊状泥岩を主体とし、砂泥互層を含む部分がある。走向はN20°～40°Eで、傾斜はNW4～9°である。

### 2-2 砂泥互層 1 (砂岩を含む) (altms<sub>1</sub>)

分布地域は一宮町天王前付近より南西に、大多喜町下大多喜付近におよんでおり、厚い砂を含んだ砂泥互層であって、梅が瀬層に相当する。走向は北東～南西、傾斜4～8°北西で、全体の層厚は約310mである。

何枚かの白色～淡桃色の凝灰岩層、軽石層を挟んでいるが、梅が瀬層の中部にある軽石質凝灰岩層 (U<sub>6</sub>層) を境として、洪積、鮮新統に区分される。底棲有孔虫化石において、*Bulimina aculeata* D'ORBIGNY から *Uvigerina akitaensis* ASANO へと優占種が変わり冷水型になる層からを洪積統としている。

### 2-3 砂泥互層 2 (altms<sub>2</sub>)

一宮町東浪見付近より大多喜町小谷松付近にかけ分布し、厚い黄褐色の砂と青灰色の薄い泥岩の互層と、青灰色泥岩と薄い砂岩との互層の複互層をなし、大田代層と呼ばれる。

層厚200～210mで、走向は北東～南西であって、傾斜は4～7°北西である。

#### 2-4 泥岩 2 (ms<sub>2</sub>)

太東崎付近の海岸および大原町から夷隅川上流の勝浦市と大多喜町の境界付近にかけ広く分布し、ほとんど一様な灰色泥岩よりなる黄和田層である。厚さ 600 m にも達し、ときに細粒砂岩および軽石質凝灰岩を挟んでいる。

#### 2-5 砂泥互層 3 (砂がち) (altms<sub>3</sub>)

大原町の中心部から南西にのび勝浦市白井久保付近に及び走向は北東～南西であるが、傾斜は北西に 10°～12° といくぶん大きくなっており、層厚 200 m である。上半は砂がち砂泥互層、下半は砂がち砂泥互層と泥がち砂泥互層の複互層となり、大原層と呼ばれる。

#### 2-6 砂泥互層 4 (泥がち) (altms<sub>4</sub>)

大原町岩船付近の海岸から、勝浦市海老山付近にのび、走向は北東～南西で、傾斜は 10°～15° 北西で、層厚は東岸で約 325 m と厚いが西にいくにつれ取れんして薄くなっている。

岩相は泥がち砂泥互層が大部分であって、多数の火山碎屑物を挟んでおり、浪花層に相当する。

#### 2-7 砂泥互層 5 (砂岩を含む) (altms<sub>5</sub>)

御宿駅付近から南西にのび分布し、西方で急速に層厚を減じている。厚い東方の海岸地域では 300 m に達するところもあり、走向は N50～70° E、傾斜は 6～14° NW～N となっている。上部は凝灰質の砂泥互層であるが、下部は乱堆積相を示し、礫まじり砂質泥岩、凝灰質砂岩などとなっており、勝浦層とされる。

#### 2-8 凝灰質砂岩および礫岩 (Cg<sub>1</sub>)

安山岩質凝灰岩を主体とし、下部には基底礫岩があり、黒滝不整合上の地層で黒滝層と呼ばれる。層厚は厚いところで 100 m といわれ、勝浦市黒鼻海岸などに観察される。

#### 2-9 凝灰質砂岩泥岩互層 (altms<sub>6</sub>)

勝浦市中島から小原付近にかけ狭い分布を示しており、南東部では薄くなり欠除している。凝灰質砂岩とシルト岩の互層であって、ときに軽石質凝灰岩を挟むことがあり、安野層に相当する。

#### 2-10 砂岩 1 (SS<sub>1</sub>)

清澄砂岩層であって、勝浦市鶴原、興津付近に分布している。走向は東～西に近く、10° ぐらいで北に傾斜している。

#### 2-11 泥岩 3 (ms<sub>3</sub>)

天津泥岩層に相当し、興津漁港付近、天道岬、大ヶ岬、明神岬など海岸の小地域に分布している。灰白色の泥岩を主とした地層である。

### 3. 地質に関連した事項

#### 3-1 天然ガスおよびヨード

調査地域内で天然ガスおよびガス付随水中のヨードを採取している抗井のあるのは3地域であり、大多喜町上瀑、中川地域、夷隅町国吉地域および岬町大東地域である。

この地区のガス付随水中での  $I^-/Cl^-$  の比は茂原地区に比し高いのが特徴である。それぞれの地区での採取層準による成分量を第5表に示した。

第5表 ガス付随水成分平均値（磯村泰治による）

層準成分 (mg/l)	大田代層下部～黄和田層上部	黄和田層	黄和田層～大原層	黄和田層・大原層～浪花層・勝浦層
$Cl^-$	13,330	16,440	17,330	19,540
$I^-$	103.5	116.2	112.1	119.3
$I/Cl \times 10^3$	7.75	7.08	6.45	6.11

それぞれの地域は沖積層の下に大田代層の分布する場所であるが、 $I^-/Cl^-$ 比が最も大きいのは、大田代層下部から黄和田層上部の層準から採取しているもので、これにつき黄和田層のもの、黄和田層および大原層のもの、黄和田層、大原層、浪花層あるいは勝浦層におよぶ層のものど深い層からの採取になるにつれ、 $I^-/Cl^-$ 比は減少している。

(千葉大学文部教官 近藤精造)

#### 参考文献

磯村泰二 (1967) 九十九里ガス田付随水の研究——主としてハロゲン類の分布について——  
岩鉱, 58, 188~200P

石和田靖章・品田芳二郎 (1957) 房総半島東岸ガス田の含ヨード鹹水の産状について  
地質調査報告 171号 1~28P

小池 清 (1951) いわゆる黒滝不整合について  
地質雑, 57, 143~155P

地質調査所 (1971) 日本油田・ガス田図 10, 茂原

樋口 雄 (1964) 千葉県ガス田地域における微化石層位学的研究、東北大地質古生物報告61号  
1~48P

### III 土 壤 図

#### 1. 山地・丘陵地の土壌

本図幅の山地・丘陵地の大部分は褐色森林土壌で占められているが、一部には黒ボク土壌・残積性未熟土壌・砂丘性未熟土壌も分布している。これらの土壌統群を更に母材、土性等で別表に示したような土壌統に分類して土壌図に表示した。

残積性未熟土壌の分布は主に臨海部の尾根筋から急斜面を中心とする一帯と下大多喜北部にみられる。前者では土壌の層が浅く全層に腐植を含み黒色を呈しているところから、腐植が少なく灰白色を呈しているところまでである。植生は一部に草生地もみられるが、殆んど自生の広葉樹林で被われている。また下大多喜北部の土壌は含有量の少ない腐植が表層から漸減し  $I_m B_A \sim I_m B_C$  の型を成している。

砂丘性未熟土壌は御宿町北部に風積されているもので、この中に植生が入っている地域と入っていない地域とがある。両者は主に腐植の含有量と土性に相違がみられる。植生が入っている地域ではA層の含有炭素量が8%を越えているところや、粘土を5%前後含むところもあるが、植生が入っていないところでは腐植も粘土の含有量も僅少である。黒ボク土壌は夷隅川上流の勝浦市北部の西側斜面や鞍部を中心に斑状に分布している。そして黒ボク土壌では殆んどスギが造林されているが、このうちの淡色黒ボク土壌は緩斜面等にあり造林されているスギの生育は良くない。黒ボク土壌や一部にみられる厚層黒ボク土壌は鞍部や凹地に分布するところが多くスギの生育は良好である。

褐色森林土壌は主に乾性褐色森林土壌と適潤性森林褐色土壌でそれぞれは、2分されるが部分的に湿性褐色森林土壌が急斜面下の崩積地や川筋の一部に限られみられる。乾性褐色森林土壌は尾根筋、南一西斜面に多い。

この中には黒ボク土壌に隣接し、それが混入していると考えられるところや、黒ボク土壌の上に崩積して乾性褐色森林土壌を形成しているところもみられるが面積的に少ない。

植生は一部造林されているスギ林もあるが、不成績のものであり、このようなところは広葉樹の二次林が多い。

表層地質で黄和田層に当る一帯では典型的な適潤性森林褐色土壌がみられる。その他のところでも北斜面や凹地を中心に適潤性褐色森林土壌のうち  $B_0(d)$  に相当する土壌型の分

布は広い。植生は竹林であるところやスギが造林されているところが多くその生育も良い。

湿性褐色森林土壌は部分的にみられるが、面積的に小さい。

## 2. 低地の土壌

本図巾中の低地の大部分が水田であり、海岸に村落、林地、畑ならびに沖積内もしくは周辺にわずかの村落、畑等が分布する。水田のほぼ80%が湿田のグライ土壌であり、(強グライ土壌を含む)グライ土壌の60%以上が強粘質の細粒グライ土壌であり、矢田統、夷隅統、千潟統にわかれる。このうち千潟統は作土下に斑紋なく、夷隅統、矢田統の順に斑紋が増加する。グライ土壌の40%以下を、壤質、粘質の馬立統、黒部統、下総統、砂質の水沢統でしめる。下総統は作土下に斑紋なく、黒部統、馬立統、水沢統の順に斑紋が増加する。本図巾中の水田はそのほとんどが夷隅川の沖積に分布し、下流域および最上流部の谷津の末端は強グライ土壌である場合がきわめて多い。灰色低地土壌の乾田土壌は夷隅川の中流部に多く分布している。灰色低地土壌は強粘質の下布施統、米沢統と壤粘質の村上統、平三統がほぼ同面積ずつ分布している。これらはいずれも下層まで斑紋が分布している。

この沖積面に存在する褐色低地土壌は、畑、樹園地、宅地等として利用されており、その土性は強粘質の松堀統から壤質、粘質の椎の木統、砂質の松岸統までひろい範囲にまたがっている。これらの土壌統は斑紋のみとめられない場合が多いが、わずかの量の斑紋の存在する場合もある。また山地土壌と同様な土壌である黒ボク土壌、褐色森林土壌が沖積周辺の低地畑、傾斜畑等として分布している。低地におけるこれら土壌の大部分は乾性褐色森林土壌の江田1統(三紀泥岩風化土壌)と上岩入1統(三紀泥岩風化物に火山灰の混じったもの)が大部分である。また厚層黒ボク土壌の文違統、黒ボク土壌の八街統、船木統、淡色黒ボク土壌の上砂統も若干の面積が存在する。

また海岸線には広く砂丘が分布し、そこには砂丘未熟土壌の神宮寺浜統と櫛統にわかれる。櫛統は神宮寺浜統に比して、畑化がすすんでいる。

これら土壌の性質の一覧を次表にしめす。

(農業試験場 三好 洋)  
(林業試験場 青沼和夫)

3. 土壤統一覽

土	壤	群	土壤名	色 グライ	腐植層序	腐植層	酸化 沈積物	土	性	母	材	堆積様式	備	考		
未熟土	残積性未熟土	壤	白浜	統	あり	なし	なし	砂・壤	第三紀			残積	Im			
			水岡	統		なし	なし	砂	第三紀			籟行・残積	Im			
黒ボク土	厚層黒ボク土	壤	神宮寺浜	統	腐植層なし	なし	なし	砂					風積	Im		
			神宮寺浜	統	腐植層なし	なし	なし	砂					風積	Im		
			文違	統	YR/YR	なし	なし	なし	壤一壤・粘	火山灰				風積	BLD	
			八街	統	YR/YR	なし	なし	なし	壤一壤・粘	火山灰				風積	BLD	
			給木	統	YR/YR	なし	なし	なし	壤一壤・粘	火山灰+洪積等				水積	BLD	
			上砂1	統	YR/YR	なし	なし	なし	壤一壤・粘	火山灰				風積	ImBL	
			江田1	統	YR/YR	なし	なし	なし	壤一粘	第三紀				残積・籟行	BA~BC	
			上岩入1	統	YR/YR	なし	なし	なし	壤一粘	火山灰+第三紀				残積・籟行	BA~BC	
			江田2	統	YR/YR	あり	あり	なし	壤一粘	第三紀				籟行・籟行	B <sub>0</sub> , B <sub>0(a)</sub>	
			上岩入2	統	YR/YR	あり	あり	なし	壤一粘	火山灰+第三紀				籟行・籟行	B <sub>0</sub> , B <sub>0(a)</sub>	
褐色森林土	褐色低地土	壤	大井倉	統	YR/YR	なし	なし	砂・壤	第三紀			河成・崩積	B <sub>E</sub> , B <sub>F</sub>			
			松の木	統	YR/YR	腐植層なし	なし	なし					水積			
灰色低地土	粗粒灰色低地土	壤	松岸	統	YR/YR	腐植層なし	なし	砂				水積				
			下布沢	統	灰	腐植層なし	なし	一強粘					水積			
グライ土	細粒灰色低地土	壤	村平	統	灰	腐植層なし	なし	一粘・壤				水積				
			六田	統	グ	腐植層なし	なし	一粘・壤					水積			
			干渉	統	グ	腐植層なし	なし	一粘・粘					水積			
			馬立	統	グ	腐植層なし	なし	一粘・粘					水積			
			馬立	統	グ	腐植層なし	なし	一粘・粘					水積			
			馬立	統	グ	腐植層なし	なし	一粘・粘					水積			
			馬立	統	グ	腐植層なし	なし	一粘・粘					水積			
			馬立	統	グ	腐植層なし	なし	一粘・粘					水積			
			馬立	統	グ	腐植層なし	なし	一粘・粘					水積			
			馬立	統	グ	腐植層なし	なし	一粘・粘					水積			
泥炭土	低位泥炭土	壤	吉田	統	強グ	腐植層なし	なし	一砂				水積				
			和泉	統	強グ	腐植層なし	なし	一粘・壤					集積・水積	底応池炭		
黒地土	黒泥	壤		統	強グ	腐植層なし	なし	一粘・壤				集積・水積	黒泥			
				統	強グ	腐植層なし	なし	一粘・壤				集積・水積	黒泥			

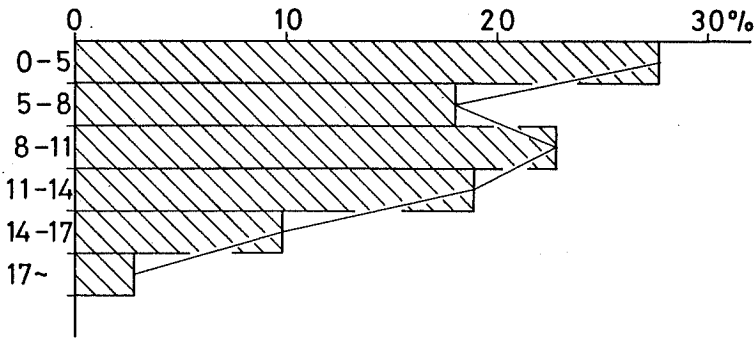
(林業試験場)  
(農業試験場)



## IV 水系および谷密度

本図幅内の主要な水系は夷隅川である。上流部から下流部まで著しい蛇行をして流れる。合流する支流の蛇行もまた美事である。しかし図幅の東側にある塩田川とその支流では夷隅川ほどの蛇行はみられない。蛇行の著しいのは落合川以西にある夷隅丘陵地を中心とした地域で、比高の小さい丘陵地の中にヘアピンカーブのような曲流が到るところにある。したがって本図幅の中央部を占める夷隅丘陵地では谷のカラミあいは複雑を極める。機上から観察したばあいでも分水界を追跡するのは容易なことではない。

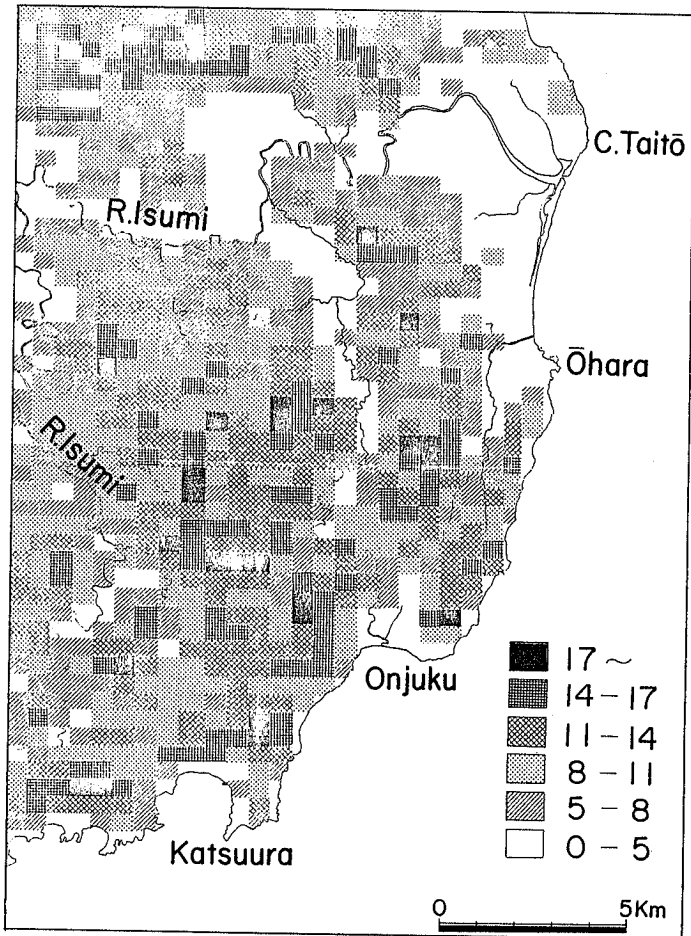
図幅の北側、睦沢村、夷隅町地域では夷隅川に合流する支流は羽毛状の水系が多い。そのほか図幅の南側では、小湊・勝浦丘陵と夷隅丘陵の両地形の境界となっている分水界が海岸に近いところにあるため、太平洋側から入る距離の短い水系が夷隅川水系をとりまくようにして放射状、直線状、平行状の水系をつくっている。



第6図 谷密度の数値分布図

次にオーバーレイの谷密度の方眼内の数値を整理してみると、第6図のような谷密度数値分布ができあがる。8～11以上が全体の50%以上を占めており「那古図幅」の0～8が全体の60%を占めることと比較すると、本図幅では丘陵地がほぼ均等に開析されているといってよく丘陵低下直前の地形ということが出来る。

また、オーバーレイにある水系谷密度の40等分の方眼内の数値を階級区分し、谷密度分



第7図 谷密度分布図

図幅を縦横40等分した方眼の中で作業規程にしたがって谷密度をしらべ同数値のところを囲んで階段区分を行ない分布図としたもの。図の中の模様細格子は17以上、格子は14~17、斜め格子は11~14、アミは8~11、斜線は5~8、無地は0~5のところである。

布のパターンをつくったのが第7図の谷密度分布図である。説明するまでもなく夷隅丘陵地と布施・岩船丘陵地域に11~14以上のところが集中し、谷沿いには少ない。これは、第2図の台風25号による斜面崩壊地分布図の中の崩壊地の多いところとよく一致している。

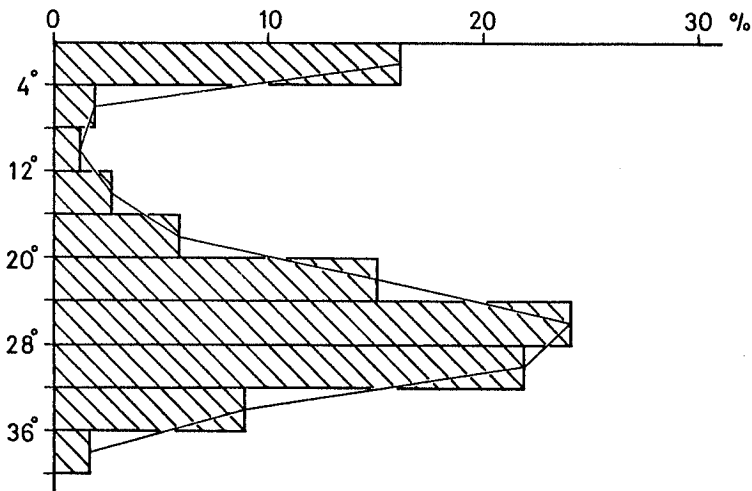
本図幅の特徴の一つは冒頭に述べたように大小の貯水池の多いことである。これら貯水池の水の供給地について水文学的な（あるいは水理地質学的な）調査が望まれる。図幅の東北端にある鶴ヶ城、亀ヶ城の貯水池では48年11月以降の乾季のときでも150ℓ/min以上の流出があり、それより西側の夷隅町国吉の北能実の小さな谷あいにある貯水池でも、50ℓ/min以上の流出量があった。これらの水の流動経路と流動状態についての詳しい調査が期待される。しかし、御宿の北にある三十根付近の谷頭付近にある貯水池のように涸渇しているところもあった。

（千葉大学文部教官 川崎逸郎）

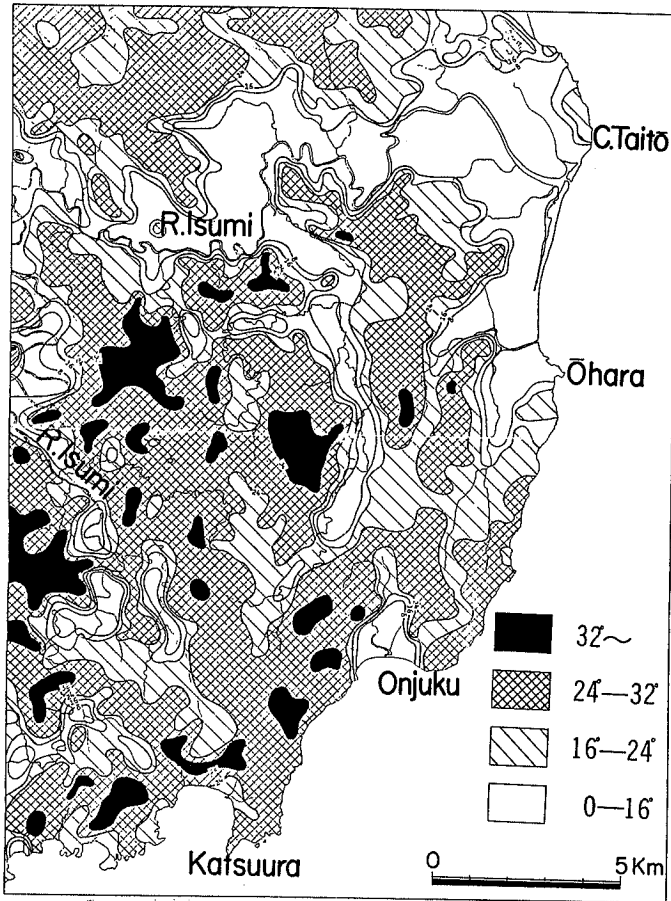
## V 傾斜区分図

本図幅の特徴は地形区分に述べたように細かく開析された丘陵地の多いことである。しかもその丘陵地は限界適応単位と呼ばれるところまで開析が進み、稜線を挟む谷頭の斜面は限界に近く稜線は鋭くなりあとは丘陵低下の道程をたどるのみという状態になっているところである。また、水系谷密度のところに述べたように、丘陵地内では蛇行した谷のカラミあいによって分水界が複雑な走り方をしており丘陵地の大部分は勾配の大きい凹形・直線状の斜面からなり稜線は鋭くやせ尾根が続いているところが多い。

したがって、本図幅の傾斜区分を5万分の1地形図の等高線を中心に行なうと、オーバーレイのような複雑な傾斜区分図ができあがる。このオーバーレイからは図幅全体の傾斜の傾向や特定傾斜の分布をみることは難しい。それで、地形図を縦横40等分した各方眼内の代表的な傾斜を等高線から読みとり、傾斜の等値線を描いて傾斜分布図をつくってみた。それが第8図の傾斜分布図である。第9図からおよその傾斜の傾向や地理的分布を読みとって貰いたい。この分布図をみると傾斜値 $24^{\circ}$ 以上のところが図幅の大半を占めているこ



第8図 傾斜数値分布図



第9図 傾斜分布図

図幅を縦横40等分した各方眼内において代表的傾斜地点を読みとり等値線を引いたもの。図の中の模様は黒地は $32^\circ$ 以上、斜め格子は $24^\circ \sim 32^\circ$ 、斜線は $16^\circ \sim 24^\circ$ 、無地は $0 \sim 16^\circ$ のところである。

とがわかる。しかも丘陵地全域に近い。その理由は、前記のように本図幅内の丘陵地の開析状態によるものであると見てよからう。当然のことであるが夷隅川の本流、支流の谷底面付近では傾斜の度合いは低い。

次に図幅を縦横40等分した方眼内の代表的傾斜の頻度を数え数値分布をつくってみると第8図のような傾斜数値分布図のようになる。第8図からも傾斜値 $24^{\circ}$ 以上が全体の50%以上を占めていることがわかる。地形区分の第3図の切峯面図にあるような比較的比高の小さい丘陵地域でこのような傾斜値をとることは珍しい。本図幅の傾斜の特徴でもある。

(千葉大学文部教官 川崎逸郎)

## VI 開発規制図

「上総大原・勝浦地域」は、内陸部に 200 m 前後の丘陵地が連なり、これをいくつにも分断して、夷隅川とその支流が切り込んでおり、天然林と人工林が混在した地域である。

一方海岸線は、太平洋の荒波を受けた変化に豊かな地形を成しており、そのほとんどが国定公園の指定を受けている。

さらにこの地域には、天然記念物の指定を受けている太東岬の海浜植物群落をはじめ、埋蔵文化財の数も多く、鳥獣保護区域、急傾斜地崩壊危険区域もあり、開発にあたってこれらに十分留意する必要がある。

### 1. 国定公園

海岸線はそのほとんどが、南房総国定公園に指定されており、太東崎、八幡岬、網代湾、勝浦湾等、雄大さと静けさが入り混じった、美しく変化に豊かな海岸線が続いている。

特別地区は、太東崎、岩和田、八幡岬、鶴原等であり、工作物の新増築、木竹の伐採、鉱物の採取、土地の形状の変更等は知事の許可が必要となっている。

### 2. 保安林

この地域には、海岸線に沿って飛砂防備、魚つき、防風、航行保安林がある。また、内陸部夷隅川の松野地域両岸に水源かん養保安林がある。

これら保安林は、飛砂の防止、防風、海洋の航行目標、河川流域の水源維持のため、森林の持つ様々の特性を活かして、住民生活の維持保全を図るため森林法に基づき指定されている。

これらの保安林を存続させるため、指定地域内では知事の許可を受けなければ、立木の伐採その他土地形質の変更等ができないよう規制されている。

### 3. 鳥獣保護区

本地域は森林の多い地域であり、多くの種類の鳥獣が棲息している。

本図幅の海岸線はすべて鳥獣保護区であり、ここは夷隅鳥獣保護区として、また、夷隅町東部に国吉鳥獣保護区、勝浦市の内陸部には総野鳥獣保護区が「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」の鳥獣保護事業計画に基づき設定されている。この地域内では、鳥獣の捕獲が禁止されており、さらに、農林大臣又は知事は営巣、給水等の鳥獣生育に必要な施設を設置

できることとなっている。

#### 4. 文化財

国指定の天然記念物として「太東崎の海浜植物群落地」、県指定の天然記念物に「勝浦市高照寺の乳公孫樹」、「大原町長福寺の槇」がある。また、埋蔵文化財は現在調査されているだけでも170ヶ所を越えており、今後開発にあたっては事前の調査および保護措置に留意する必要がある。

これら文化財は「文化財保護法」等により保護措置がとられている。

#### 5. 国有林

国有林は、勝浦市の内陸部から大多喜図幅にかけて約470haあり、全域が水源かん養保安林に指定されている。

#### 6 その他

##### (1) 海岸保全区域

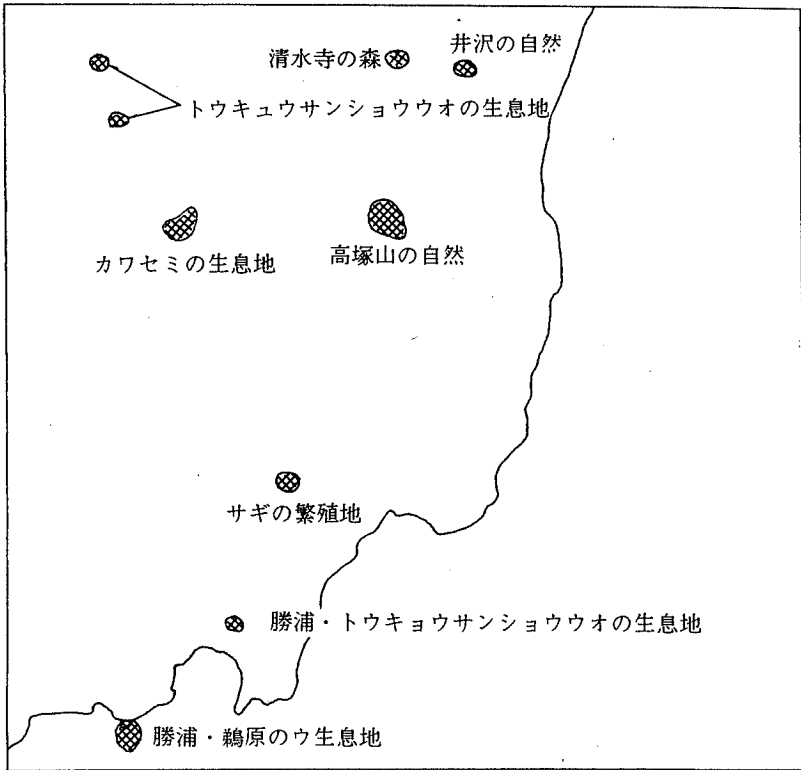
本地域の海岸保全区域は、興津(2,044m)、鶴原(3,830m)、部原(1,810m)、御宿(970m)、岩和田(3,860m)、大船谷(5,170m)、日在浦(2,700m)、和泉浦(1,500m)、太東(3,500m)等がある。

これらの区域では、土石の採取、施設の設置、掘さく等の行為について、「海岸法」により制限されている。

##### (2) 学術上貴重な自然群

勝浦、鶴原にはウミウ、ヒメウのよい生息地がある。他にも動植物の棲息している自然環境のすぐれた地域が残されており、これらの確保を図る必要があろう。





第10図 学術上貴重な自然群

(3) 急傾斜地崩壊危険区域

勝浦、部原、御宿に6ヶ所あり、「急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律」により、水の放流、立木の伐採等の行為については知事の許可を要するほか、区域内の土地の所有者および管理者は災害防止に努めることを義務づけられている。

(千葉県企画部企画課 長倉広典)

<参考文献>

- 千葉県記念物所在地図(千葉県教育委員会)
- 天然記念物緊急調査 植生図・主要動植物地図 12 千葉県(文化庁)
- 自然見学シリーズ1 千葉県の自然(千葉自然研究会)

## VII 土地利用現況図

「上総大原図幅」は250km<sup>2</sup>、「勝浦図幅」は30km<sup>2</sup>の面積を有していて、そのほとんどが広葉樹と針葉樹が相半ばした丘陵地が連なり、これら丘陵地を夷隅川とその支流が分断している。平地はわずかであり、海岸沿いの和泉、日在、御宿以外には河川沿いに一部あるのみであり、農地、宅地はこれらに沿って位置している。

第7表 民有地土地利用現況

昭和47年（単位：ha）

市町村		勝浦市	大多喜町	夷隅町	御宿町	大原町	岬町	計
区 分	面 積	9,489	13,083	4,447	2,504	6,701	4,685	40,909
民 有 地	総 面 積	6,281	8,148	3,544	1,884	5,509	3,478	28,844
	構 成 比 (%)	66.2	62.3	79.7	75.2	82.2	74.2	70.5
田	面 積	1,197	1,571	1,387	336	1,437	1,236	7,164
	構 成 比 (%)	19.1	19.3	39.1	17.8	26.1	35.5	24.8
畑	面 積	638	487	357	172	431	619	2,704
	構 成 比 (%)	10.2	6.0	10.1	9.1	7.8	17.8	9.4
宅 地	面 積	272	223	181	99	311	238	1,324
	構 成 比 (%)	4.3	2.7	5.1	5.3	5.6	6.8	4.6
山 林	面 積	3,040	4,346	1,361	942	3,238	1,156	14,083
	構 成 比 (%)	48.4	53.3	38.4	50.0	58.8	33.2	48.8
原 野	面 積	1,118	1,491	254	334	63	229	3,489
	構 成 比 (%)	17.8	18.3	7.2	17.7	1.1	6.6	12.1
雑 種 地 他	面 積	16	29	4	—	27	—	76
	構 成 比 (%)	0.3	0.4	0.1	—	0.5	—	0.3

## 1. 農 地

夷隅川流域にはかなりの広がりを持った優良な水田があるが、その他の地域には一部海岸沿いや山間部の谷津田、傾斜地沿いの農地が点在しているだけである。したがって、一般的に農地は少なく、この地域の大半を含む夷隅支庁管内において耕地率 $\left(\frac{\text{耕地面積}}{\text{全面積}}\right)$ は23.7%（県平均36.4%）と低い。また、水田率 $\left(\frac{\text{水田面積}}{\text{耕地面積}}\right)$ は79.0%（県平均58.3%）と米作依存度の高いことを物語っている。しかし、今後は生産性の向上のため土地基盤整備、経営近代化施設整備、大規模農道の建設のほか、農業用水の確保のため荒木根、東、御宿ダムの建設が予定されており、農業構造の改善が期待されている。

## 2. 林 地

本地域は、温暖多雨で森林には恵まれた気象条件であり、林地はほぼ50%を占め、県内では林野率の高い地域である。

木材生産そのもののほか、たけのこ、しいたけ等のいわゆる特殊林産物の生産が活発に行われている。

## 3. 都市・村落

この地域の宅地面積は比較的少なく第7表でわかるように、民有地中4.6%を占めるにとどまっている。人口集中地区が勝浦市と大原町にあるが、一般的に人口は減少ぎみである。

（千葉県企画部企画課 長倉広典）

1974年3月 印刷発行

房総半島総合開発地域  
土地分類基本調査

上総大原・勝浦

編集発行 千葉県企画部企画課  
千葉県市場町1の1番地  
印刷 株式会社 弘報社印刷所  
千葉県椿森1-14-2